

やまと 民俗への招待

鹿谷 紹

県東北部の山添村賀生は、戸数70戸ほどの集落で、鍛冶屋出、大垣内、後出、峯出、谷出の垣内に分かれている。ここに10戸前後の伊勢講が七つ並まれてきた。講ごとに行事が當まれるが、4年に一度の閏年の4月上旬には、各講の代参人が伊勢神宮に参拝する。小さな紙片に名前を書いて、ヤドモト（宿元）や代参する人、買物役やヤマ作りをするフロタキ役をフリアゲなどのクジで決める。ヤドモトの順番の決まっている講もあつた。4月3日の神武さんの日までに、子供を含めて總参りしだしがもあつた。昔は徒步の旅だった。後には上野や名張まで歩き、電車を利用した。さらに今では自動車で日帰りと、時代と共に参拝の様子も様変わりした。伊勢参宮の前日には、ヤドモトでヤマ作りが行

われる。松や石や苔を用いて、夫婦岩や伊勢神宮の境内などを再現する。朱の丸蓋を石の間に置いて日の出を再現する所もある。当曰、代参人たちは氏神の十二社神社にまず参ってから、伊勢参りをする。神宮で求めたお祓いさん(御札)はヤドモトのヤマに納める。翌曰は

伊勢参宮の道中の疲れを癒やす「足休み」の日だ。集落の七つのヤドモトでは、襖を取り払って広間を作り、ここで子供からお年寄りまで、講の家族全員がすらりと集まつて、楽しく会食する。昔の家は、大勢が集まるようを作られていることがよく分かる。

そういうしてみると別
の伊勢講の踊りの一団が
やつてくる。「踊り込み」
だ。座敷やカド(庭)で、
太鼓を叩いて、歌を歌い
ながら、御臺踊りや伊勢
参り、住吉踊りが踊られ
る。踊り手は女性で、手
にシナイと呼ぶ様子(さがは)
ようなものを振り、日の
丸扇を両手に採って踊

モトを巡り、酒食の響きを存分に受ける。仮装は獅子舞や、志村けんのバカ殿様を演じたのを見たことがある。どんな仮装をするかは周囲には秘密に準備したという。

この日の晉生は、有線放送の音楽が一日中鳴づけ、踊りと仮装の集団が、七つのヤドモトを行

おかげと信仰し、4年に一度、歌と踊りの一日を過ぎる習慣は、集落で完結した楽しくおおらかな民俗だと感嘆する。その後、行事のこれまで通りの実施は難しくなった。踊り込みは平成24(2012)年までとなり、バスで伊勢へ総参りすることになった。御蔭踊り



●御蔭踊り=春日大社で2016年11月
月▽踊り込みの仮装=山添村菅生で1992年4月(いずれも筆者撮影)



る。踊りが終わると、踊り込みを受けた方が「（おほ）踊りのよさ」を称える、「誉め言葉」が述べられる。その言葉は虫歟へじ、花（ハナ）ハジ、櫻（サクラ）ハジなど多

つたり来たりする大騒ぎとなる。夜には、ヤドモトのヤマに参り、伊勢のお札をいただき、自家に持ち帰って祀る。踊り込みの翌日は、サンヨウウ

4年ごとの踊り込み

表

神社で踊られている。
(奈良民俗文化研究所代)